師匠と一夜

ワンナイト・ホラー　8

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18884277

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, モブ霊, 芹霊, エク霊, ♡喘ぎ, 男性妊娠, 本番無し, シリンジ種付け

ワンナイトしまくってる師匠が相談所のメンツにバレて泥沼化する話の８話目です。今回シリンジによる種付け、男性妊娠描写があります。なお攻めの倫理観がアレとなっております。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

ワンナイト・ホラー　８

俺を拉致した時に、俺の暮らしていたアパートはあいつらが引き払ったらしい。
まあ今更文句を言っても仕方ない。
問題は。
マンションの空き部屋に、俺の部屋にあった家具と荷物が無造作に積まれてるこの状況だ。
……臨月で荷解きとか、マジかよ……。
とはいえ段ボールを開けていかないと、仕事のものがいくつか見つからない状況になっている。
俺は空き部屋から仕方なく、段ボールを一つずつ自分の部屋に持っていって開封することにした。
重たい。腰が辛い。
「霊幻さん！？何してるんですか」
自分の部屋でくつろいでいた芹沢がたまたま出てきた時に俺を見て驚く。
「いや、荷解きしないと除霊用の資料が出てこないから……」
「言ってくださいよ、こんな重いモノ持つなんて……」
「だって芹沢これから仕事だろ？あんまり休憩邪魔したくなくて」
芹沢がため息をつく。
「こんなもの、超能力を使えば楽にできるんですよ、俺なら。霊幻さんは自分を大事にして、もっと周りに頼ってください」
「……すまん」
俺が妊娠してから、同じような内容で何度も芹沢には叱られている。
つい自分でやろうとしてしまうのは、俺の癖だ。自分が妊婦だということを二の次にしてしまう。
それは危険なのだと、教えてくれる。
「これ、押し入れに詰めていけばいいですか？」
段ボールの中身はシーツの替えなど大き目の布モノだった。
「うん、そうだけど……」

芹沢は超能力で段ボールの中身を次々と押し入れに詰めていく。
「はい終わり。次の箱に行きましょうか」
「……」
思わず芹沢の後ろから抱きつく。
「な、なんですか！？」
「お前、いい男だな」
広い背中に頬擦りする。芹沢と付き合えて俺は幸せものだ。
「ただいま。……何してるんです」
モブが大学から戻ってきた。
「芹沢が好きだなぁって噛み締めてた」
「なんですか、それ。妬けるなぁ。ほら」
モブにおかえりのキスをする。
モブは満足そうに微笑んだ。
「モブも帰ってきたし、2人とも相談所を頼むわ。本当は資料を探し出して渡しておきたかったんだが……」
「俺が戻るまで、荷解きしちゃダメですからね。ベッドで休むか、テレビでも見ててください」
芹沢に釘を刺されて苦笑する。
予定帝王切開はもう来週に近づいている。
今は特に気をつけなくてはいけない時期だ。
芹沢が先に相談所に向かい、エクボとモブが入れ替わりに片方は相談所に、片方はマンションに帰ってくる。
「……見張ってなくても、もう逃げたりしないのに」
誰か1人が必ず俺のそばにいる。
「さあ、それは俺たちが判断することだからな」
カチ、とエクボがタバコに火をつける。
「そうかよ」
俺はタバコから逃げるように自分の部屋に戻る。入院の荷物をそろそろ纏めないと。
病院から渡された入院のてびきを読みながら荷物をまとめていると、エクボが部屋に入ってきた。
「霊幻」
髪を撫で身体を抱きしめようとする動きに抵抗する。

「今、疲れてるんだよ」
「俺様お前のために相談所で頑張ってきたんだぜ？ご褒美があってもいいんじゃねぇのか」
疲れてる、っつってんのに。
俺はひざまづいてエクボのズボンのジッパーを下ろす。
エクボの逸物を咥えて、啜り上げた。
「さすが元ビッチ、上手だなぁ？」
喜ばせるだけだとわかっていても、ジロリと咥えたままエクボを睨み上げる。
そのままズブズブと喉奥まで飲み込んで、きゅ、と締め付けてやった。
「……っ」
エクボがぶるりと震えて俺の口の中に出す。さすが疲れマラ、早かった。
俺はティッシュに精液を吐き出す。
「お前もこんなになってるじゃねぇか」
しゃぶって勃った性器を足でぐりっとこねられて腰が揺れる。
「なあ、ヤろうぜ」
「……疲れてるっつってるだろ」
俺はエクボの足を掴んでぐいとどける。
イくと子宮が収縮する。臨月にもう無闇に刺激を与えたく無かった。
「つれねーの」
つまらなそうにエクボは部屋から出て行く。
フェラをしてさらに疲れた俺は少しベッドに横になった。
同じ男のはずなのに、妊娠すると「分かってもらえない」ことが多くなったと感じる。
仕方ないとはいえ、それは俺をひどく落胆させた。

※

出産は一瞬だった。
下半身麻酔をかけられ、しばらくすると産声が聞こえて来る。

「おめでとうございます、元気な男の子ですよ」
写真を撮ってもらって。
感動で涙が出てくる。
幸せ……に浸っていられたのも、一瞬だった。
「うう〜」
切られた傷口が痛い。いや、めちゃくちゃ痛い。腹を切られてるんだから当たり前か？いやそれにしても痛すぎるだろう。ナースコールを押して強い痛み止めをもらう。だめだ、ぜんっぜん効かねぇ。個室に唸り声が響く。しばらくしたら疲れで気絶し、また起きたら痛みに苦しむ。
「数日したらマシになりますから」
マシになるだけかよ。マジかよ。
「今日から赤ちゃんの世話をしてもらいますからね」
「は……？」
これだけ痛いのに、３時間に一回授乳して、オムツが濡れたら随時替えろと言われる。
医療従事者が鬼に見えたのは初めてだ。
「うう、うぐぉ」
痛みに唸りながら授乳して、オムツを替える。泣いたら抱き上げる。地獄の責め苦ももう少し楽なんじゃないか……？
「師匠、大丈夫ですか」
「……まあな」
お見舞いにきたモブがノンキに看護士に赤ちゃんを抱かせて貰って笑っている。
「……モブ、オムツ替えてもらってもいいか」
「ええっ！？怖くて無理ですよ！！」
……まあ、いいけどよ。
俺はよろよろ立ち上がりながら赤ちゃんのお尻を拭いてオムツを替える。
「はー、やっぱりお母さんってすごいなぁ……あ、僕、大学の講義が次にあるんで、そろそろ失礼しますね」
慌ただしくモブが出て行く。
何故か、涙が出てきた。

「おー、よしよし」
つられたのか、泣き出しそうな赤ちゃんをあやす。世界に俺とこの子２人きり。何故かそんな気がした。
「霊幻さん、今日は赤ちゃんの沐浴を練習しましょう」
「え」
出産は病気じゃない。
そう言いたげに俺の痛みや傷は二の次におかれて、退院させるためのスケジュールが進んでいく。
「はい……」
俺は赤ちゃんが寝ているコフィンを押しながら、沐浴室に向かった。

※

「おかえりなさい、師匠」
「……ただいま」
正直、もう少し入院していたかった。
腹の傷はまだまだ痛い。赤ちゃんを看護士さんに「少し見てて」もできない。
「明日から相談所に復帰ですね。霊幻さんが戻ってきてほっとします」
芹沢の言葉に無理矢理笑ってみせる。
相談所の常連客は随分減ったときいている。子供にかかるお金のことを考えると、これ以上休むわけにはいかない。
「とりあえず、寝る……」
授乳して、赤ちゃんはやっと寝たところだ。１時間でいいから眠りたい。
「抱っこさせてもらってもいいですか」
「あっ」
久しぶりの我が子にモブが赤ちゃんを慣れない手つきで抱き上げる。
案の定、赤ちゃんが起きてぐずり出した。俺は小さくため息をつく。

「わっ、泣き出しちゃった。やっぱりお母さんじゃないとダメかな」
慌ててこちらに渡してくるのを抱いて揺らす。
「シゲオ、お前それ……」
エクボが何か言いたげに口籠った。
「……お前だって父親だろ」
それだけ言って黙り込む。が、俺はエクボのその言葉に何故か泣きたくなった。
それからの生活は想像を絶するハードさで。腹がズキズキ痛むのにうめきながら、３時間ごとに起きては授乳して、時間になったら子供を連れながら相談所に行って仕事をする。
ふらふらするが、仕方ない。金がないと子供のオムツも買えない。
「……お前、完母（※完全母乳）やめろ。見ちゃいらんねぇよ。一部粉ミルクにしろ。それなら俺たちが赤子の面倒見られる」
「えっ」
エクボに突然言われて、目が点になった。嬉しい。でも。
「粉ミルクは高いから……母乳が出るんだし、節約しないと」
「馬鹿、それぐらい出してやるよ。母乳も搾っておいておけ。冷凍したらしばらくもつ」
エクボがすぐ薬局で粉ミルクを買ってきてくれた。
「ガキの面倒なら見たことあるから、俺様に任せとけ。そのうち残りの２人も使い物になるようにしてやる。最近まともに寝てねぇだろ？寝ろ」
ヤニくさいエクボに抱きつく。
しくしく泣き出した俺の頭を、ぽんぽんとエクボが優しく叩いた。
子供を産んでから、初めて６時間寝た。それだけで随分疲れが取れた。
「人肌ってどれくらい？」
「自分にあるだろうが、肌。肘の裏で測って……自信がなけりゃ首筋に当ててみりゃいい」
芹沢がエクボに粉ミルクの作り方を習っている。
……２人がいてくれて、良かった。
起き上がって赤ちゃんの様子を見に行く。すうすうと寝ていた。

「おうシゲオ、今、芹沢に粉ミルクの作り方教えてるから、お前も聞いていけ」
大学からモブが帰ってきた。サークルの飲み会でもあったのか、少し酒くさい。
「ごめん、今、疲れてて……あとできくよ」
何故だろう。
モブのこういうところが、子供が産まれてからは、すこし、悲しい。
結局エクボと芹沢が交代で子供を見てくれて、朝まで寝る事ができた。それだけで身体が随分と良くなった気がする。今日は呪術クラッシュをしても大丈夫だろう。
「では、お祓いしますね」
やっと戻ってきてくれた常連客の背中を押す。
じわ、と熱いものが下腹部から漏れる感覚がして。
「霊幻先生！？」
客の声が遠くに聞こえる。

次に目覚めたら、また産婦人科に逆戻りだった。
ふと見ると点滴に輸血が繋がれている。
腹がイテェ。
「子宮の傷が開いて、緊急手術を行いました」
胡乱に左を見ると、医者が泣きそうな顔で左手を握っている。
「一命は取り止めましたが、予断は許さない状況です」
「赤ちゃんは」
「お連れの吉岡さんが見てくれています」
「……入院費は」
「今は考えずに、生きることを第一にしてください」
あー、俺、そんなヤバい状況になってたのか。
出産って死が近いなぁ……。
いつごろ仕事に戻れんだろ。入院費を考えるだけで頭痛ぇな……。
「父親の影山ですっ、師匠はっ！？」
バタバタとモブが入ってくる。
と。

バキィ、と産婦人科医にモブが殴られていた。
「あんたに父親を名乗る資格はない」
はぁはぁと医者が肩で息をする。
「え、ちょっ、先生？」
「無理矢理妊娠させて、妊婦検診も行かせず、産後直ぐの霊幻さんをフルタイムで働かせて……」
医者の手がぶるぶる震えている。
モブはぽかんと医者を見上げていた。
「あんたが超能力者じゃなければ、何度も警察に突き出してた！！せめて奥さん子供を養うこともできないなら、子供なんか作るな！！」
この医師は裁判に協力してくれた人だ。俺の事情はよく知ってる。
「出て行ってくれ。この病室には赤ちゃんの父親と肉親以外は入れないことになってる」
「いいんだ、先生」
俺は静かに医者に言う。
「モブが俺を愛していないことも、赤ちゃんを愛していないことも、俺は分かった上で産んだんだから」
さあああ、とモブの顔が青くなる。
「モブ、今はまだ大学の時間だろう？学校に戻った方がいいんじゃないのか」
穏やかな俺の声にカタカタと震え出すモブ。
「し、師匠……僕に悪いところがあったのなら直します。だから」
「モブ。お前が俺を愛しているというのは錯覚だよ」
前から言ってるだろう。
「愛ってのは、とても地味で面倒くさくて、辛いものだ。３時間ごとにミルクをあげたり、オムツが濡れるたびに替えたり、そういう日常の積み重ねなんだ」
「これからはミルクをあげますし、オムツも替えます。だから──」
「もう遅いんだよ、モブ。積み重ねなんだ。愛してないを、お前はこれまで積み重ねてきたんだよ」
泣くなよ、モブ。お前は幼い。仕方のないことだ。
「モブ、お前はまだ若い。だから甘えられる俺への恋を、愛だと勘

違いしただけのことなんだよ。心地よい俺の隣を、自分が愛してると勘違いしただけなんだ。大丈夫だよ。全部俺は受け入れるから」
愛してるよ、モブ。
「俺のことも、子供のことも忘れて、お前は大学生活を謳歌して、恋人を作って、まっとうな結婚をするんだ。それが何よりの俺の願いだよ」
ああ。
そんな、絶望した顔をすんなよ。
お前には笑っていて欲しいんだ、モブ。
「どうすれば──僕の愛を、師匠に信じて貰えますか？」
「そうだなぁ……今すぐあのマンションを出て、相談所もやめて、二度と俺と茂隆に会いに来ないでくれたら、それは愛かもしれないな」
「あ」
ああああ、と頭を抱きしめてモブが絶叫する。
分かるよ、間違いを指摘されたりすると恥ずかしくて叫びたくなるよな。
「まぁまあまあまあ、そんなにいじめてやるなよ、霊幻」
入院セットを持ちながらエクボが入ってきた。
「霊幻が難攻不落なのは分かってただろ？こいつの弁舌に翻弄されるなよ。せっかく手に入れた幸せを失うぞ、シゲオ」
「……エクボ」
「本当に大事なら、霊幻や茂隆から手を離すな」
「うん……エクボ、僕、大学を辞めて働こうかと思ってるんだけど」
「！？」
俺の貧血の顔が更に青くなる。
「相談所を手伝いながら、バイトもして粉ミルク代くらいは余裕で出せるようになりたい。今はエクボに出してもらってるでしょ？」
「別に粉ミルク代くらい俺ぁかまいやしねぇが……」
「オムツ代だって師匠が出してくれてる。何も手伝いもせず、お金も出さず……僕、父親なのに、何してたんだろう。挙げ句の果てに師匠を無理に働かせて死なせかけた」

かた、と震える手をモブがポケットに突っ込んで隠す。
「師匠を失うところだったんだ」
はあ、とため息をつく。
「な？お前は俺を愛してなんかいないんだよ」
「ちょっと黙ってろお前」
エクボに少し怒った口調で赤ちゃんをあやしながら言われる。
「大学を辞めるのは絶対ダメだ。大学だって自分の金で行ってたんじゃないだろ。それに、理由をご両親になんて説明するつもりだ？子供のことは黙っておくって２人で決めただろ」
子供は俺の籍に入れる。そう決めていた。モブの戸籍を汚したくなかった。
「……僕は、どうしたら……」
「いいかシゲオ、学生のうちは発言権なんてねぇんだよ。諦めろ。霊幻にゃ勝てねぇよ。卒業して、就職して、それからだ」
「そんな……」
「今は耐えろ。自分のできることだけしろ。……そういう時期もある」
モブが唇を噛む。俺は血液不足でうとうとしてきた。
「……モブ、いつでも俺たちを捨てていいからな……」
俺たちは、お前の足枷にはなりたくないよ。
「だぁから黙ってろっつってるだろが」
睡魔に負けた俺は、愛するモブがどんな顔をしていたのか、分からなかった。

※

赤ちゃんを産んで１年経って。
「霊幻、そろそろいいよな？」
エクボが俺の下腹を撫でながらねだってくる。
「俺様の子を産んでくれよ」
次はエクボの番。
「……分かった」
俺がそう言うとエクボは日本酒を盃に注いできて、俺のそばに置

く。
「少しでも集中できるようにしておかないとな」
エクボは人工受精に使う注射器のピストンを引き、空っぽのシリンジの上に手をかざす。
「俺様の霊力を結晶化して実体の精液を作り出す。かなり消耗するからな、しばらくはデカい除霊は手伝えねぇぞ」
緑の閃光があふれ、シリンジの中に精液が生成されていく。
盃の日本酒が波打ち、瞬く間に蒸発して減っていく。
「ぐっ……ううっ、はぁっ、はぁっ」
そうしてシリンジいっぱいの精液が出来上がった。
「……注入するぞ」
俺はズボンと下着を脱いでベッドに横たわる。
ひた、と注射器の先端を当てられて。
「ひあっ！？」
頭まで走った衝撃に目を見開いた。
「これは霊力の塊だ。いまからするのは霊姦みたいなもんだ。キツいと思うが、がんばれよ」
「そんっ……きいてない……」
ずぶ、と注射器の先端を入れられて悲鳴が漏れた。
「からだがっ……うちがわから、ひっくりかえされるっ……」
「上級悪霊の霊力の結晶だ。侵入されると魂が抵抗する。頑張って受け入れてくれ」
ず、ずぶ、と少しずつ注射器が挿入される。
「いやあっ……しぬぅっ……むりぃっ……っあ！？」
こつ、と注射器が前立腺に当たった。
「あああああああああっ！？♡♡♡♡」
どか、と前立腺を殴られたような快感の波。
我慢できずに精を零す。
生理的な涙がポロポロ落ちた。
「もうちょっとで子宮口だ。頑張れ」
ぐっ、とナカを進む注射器に背が仰反る。死にそうなのか、イきそうなのか、もう判別がつかない。
「出すぞ」

「ま」
って、と言わせてもらえず、一気に中出しされる。
「あぁああぁああぁっ♡♡♡」
腹から閃光が脳まで突き抜ける。
お腹の中がじんじんあつくて、腰がガクガク揺れた。
「できたぁ……これ、絶対赤ちゃんできたぁっ……♡」
「良く頑張ったな、霊幻。体で暴れてる霊素が落ち着くまで抱きしめててやるから、しっかり受精しろよ」
「ああ♡」
全身を快楽の緑のヘビが皮膚の下を這っている。
それに身悶える俺を、ぎゅっとエクボが抱きしめてくれている。
そういや。

呪いで男の身体に作った子宮に、上級悪霊の霊力で作った精子で孕んだものって、『何』なんだろう？